各地域のまちづくり活動から①

檜山茶の保存活動

檜山茶は、1730年ごろに京都の宇治から檜山に伝えられました。

改良も改植もされることなく、昔ながらの手作業により守られてきた檜山茶は、古来の宇治茶の遺伝子を引き継いでいる茶として、希少なものとなっています。

茶の保存活動は、地域にとってどんな意味があるのでしょうか。

茶畑を保存していくことは、地域の人の思いを大切にすること

桧山地域まちづくり協議会

存続が危ぶまれる茶畑

約280年前に、京都から檜山に伝えられた檜山茶は、後に武士の内職として栽培が広がり、最盛期には200戸、栽培面積にして10ヘクタールにも達していました。しかし、時代の変遷とともに、明治以降、それまで栽培していた武士が住み慣れた土地を離れることになったこと、食糧難時代にはイモや大豆に植え替えられたことなどによって、現在の面積はわずか50アールほどになってしまいました。

このままでは、種としても貴重な茶畑そのものの存続が危ぶまれることや、昔ながらの製法、伝統が途切れてしまいます。そこで、地域の貴重な宝を存続させようと、檜山地域まちづくり協議会が地域の人に呼びかけたところ、42人の住民が保存活動のボランティアに手を挙げました。

茶畑を守っていくことの意義

檜山地域まちづくり協議会では、「自然に生かされた文化がかおる歴史のまち」を地域の将来像に掲げ、各種まちづくり活動に取り組んでいます。

地域には、檜山城跡や多宝院をはじめ、多くの文化財や史跡のほか、雰囲気のある街並みなど、歴史的な資源が数多く残っています。それらは、檜山に生まれ育った人にとって、地域に愛着を感じる源になっています。

茶畑を守っていくことは、地域の人の愛着や誇りといった人の思いを大切にしていくことにつながっています。

これからのキーワードは「人」

これからのまちづくりは、「モノ」ではなく「人」がキーワードになってくるといわれています。

少子高齢化やコミュニティの希薄化で、人の結びつきが今後さらになくなってくることがどこの地域でも危ぐされています。

茶畑の保存活動は、地域で脈々と受け継がれてきた営みを通じて、過去と現在、そして未来の檜山の「人」を結ぶ活動と言えます。

檜山地域の人たちが、人の結びつきを強め、まちづくり活動を実践していることには、頼もしさを覚えます。地域の将来を作っていくのは、そこで暮らす住民の力。そのことを強く感じました。

檜山地域まちづくり協議会
副会長　野呂進さん

これまで檜山茶の伝統は、檜山に住む梶原さんと大高さんの継承者としての意気地のみに頼ってきましたが、この先も安泰なわけではありません。そこでまちづくり協議会では、檜山茶を歴史の語りに終わらせることなく、技術の保存と伝承に、和の心をもって取り組むべく立ち上がろうとしています。

先人が風流として導入したお茶が、さまざまな経緯を経て商業的に成り立たなくなった今、これを地域再生の機会ととらえ、郷土の自然や伝統、先祖の意志に向き合い、昔ながらの製法を後世まで伝えていきたいと思っています。

そして、将来再び檜山の後輩たちが時々の時代と向き合いながら、新しい創造へと向かってくれることを願っています。